

壁が崩壊する直前のウィーンに暮らして

～あるチェコスロバキア共産党元幹部との出会い～

在オマーン日本国大使

森元 誠二

在オーストリア大使館の同僚を通じて、オーストリア日本人会の50周年記念誌への寄稿を依頼されたことを大変光栄に思います。先ず、日本人会が長きに亘って活動を継続され、この記念すべき年を迎えられたことに対し心からお祝い申し上げたいと思います。2度の滞在を経験したウィーンは、我が家族にとって第二の故郷とも言うべき存在であり、ここで生まれた娘の「緋重奈（ビエナ）」は我々のウィーンとの出会いをいつも想起させてくれます。

私が最初にウィーンへ赴任したのは、1985年7月から東西の壁が崩壊する直前の1989年2月までの期間に当たります。当時のオーストリアは、東西陣営の狭間に位置する永世中立国でしたが、ハプスブルク帝国の伝統を受けて近隣の東欧諸国とは緊密な関係を築いていました。そのような関係から、当時の大使館には東欧情勢を観察するという重要な役割がありました。

大使館で一等書記官として政務を担当する私は、東欧からオーストリアに亡命していた幾人かの人物に時々接触し、それぞれの国における情勢やゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の登場以来各国に萌芽する民主化の動きなどについて意見交換したりしていました。その中で、もっとも印象的な人物が元チェコスロバキア共産党幹部だったM氏でした。彼は「プラハの春」を導いたドプチェク共産党第一書記の右腕でしたが、当時は国を追われてウィーンのある政治経済研究所の研究員をしていました。

M氏には、学生時代にモスクワ大学で後のゴルバチョフ書記長と同じ寄宿舎で生活を共にした特異な体験もあって、意見交換はゴルバチョフ改革が東欧に真の自由をもたらす得るであろうかということにも及びました。今でもはっきりと覚えているのですが、ある時、彼は私に次のように述べました。

「ゴルバチョフの改革路線は、ソ連・東欧に新たな動きをもたらす可能性がある。しかしながら、同時に、彼はこれら各国における民族主義の脅威を軽視しすぎており、いずれそれが大きな動きとなって自国の足下を揺さぶりかねない危険性を十分に認識していない。」

その後の歴史の発展を振り返ると、M氏の洞察がいかにかを得たものであったかお分かり頂けると思います。私がウィーンを去る頃には、市内にこれまで比較的自由に出入りの出来たハンガリーに加えて、チェコスロバキアやポーランドの車両ナンバーを頻繁に見かけるようになりました。ある土曜日には、これら東欧圏から買い物に訪れる車が市内に溢れ、マリアヒルファー通り付近が大渋滞に陥るということもありました。東西の壁は既に着実に崩壊し掛かっていたのです。その後、M氏がチェコスロ

オーストリア日本人会の50年

バキアの政治に戻ることはありませんでした。ある地方の大学に身を置く傍らオーストリアでひっそりと生涯を終えることとなります。

この様な激動を目の当たりにしつつ、私は次の任地バグダッドに向かったのです。まさか、在勤中にサッダーム・フセイン大統領がクエイトに侵攻して新たな激動を体験することになるなどとは予想だにすることもなく…。

<森元 誠二>

1975年4月外務省入省、2008年6月から在オマーン日本国大使。80年代の大使館勤務に加えて、2003年6月から2005年10月まで国際機関代表部大使としてウィーンに在勤。